

『明治新々五百題』について

山下 泰史

『明治新々五百題』は、明治17年(1884)に出版された類題句集である。旧派の俳人である東旭斎によって編集されたもので、『明治五百題』の続々編にあたる。

明治以降の俳諧の研究は、正岡子規に代表される新派と呼ばれる集団を研究対象にしたものが多く、一方で旧派の俳諧研究は少ない。研究者の間で、旧派の俳諧は天保俳壇の余瀝を舐るに過ぎないものという認識がされていたためである。しかし、俳諧史を見ると、旧派から新派への移行は即時的かつ全面的に行われたのではなく、しばらく新派と旧派が入り乱れていた時代が続いた。したがって、当時の俳諧文化について考察を行うには、新派だけでなく、旧派の俳諧を研究することが不可欠である。

また、俳諧は俳文芸だけでなく、人名録、題目などを通して、当時の郷土文化を知る手がかりとなる。したがって、旧派の俳諧を研究することは、明治時代の庶民的文化を明らかにする一助となりうる。

当時の俳壇の様子・郷土文化を研究するためには、それぞれの俳諧の詳細を明らかにする必要がある。『明治新々五百題』は、その開化の部に注目されて、越後敬子氏の論文で触れる程度に紹介されるものの、それ以外の研究者に注目されておらず、未だ詳細が明らかにされていない。しかし、『明治新々五百題』には、詳細な人名録、発行所林が付与されている。当時類題句集の続編が編まれたり、詳細な情報が付与されることはまれであり、本書は明治時代の俳諧、俳人を研究する上で貴重な資料であると考えられる。本研究では、これまで部分的にしか触れられてこなかった『明治新々五百題』の内容を明らかにし、本書の資料的な価値を明らかにすることを目的とする。具体的な研究方法としては、『明治新々五百題』の翻刻を行い、その内容を Excel に入力し、そのデータをもとに内容の分析を行った。

内容を調査した結果、本書には題目が1343題、発句が5617句収められていることが分かった。特に開化の部では、明治時代の教導職政策に関する題が含まれており、俳諧が政府の政策を推進するための一翼を担っていたことが見て取れる。加えて、『明治新々五百題』には、俳人の住所等が記載された詳細な人名録が付与されており、本書に関心を寄せていた俳人の住所が明らかとなった。また、書店の住所が書かれた発行書林が付与されているため、本書がどのような地域で販売されていたのかを知ることができた。これらは明治時代の俳諧文化を探る手掛かりとなる。このような情報が記載されている『明治新々五百題』は当時の文化を研究する上で貴重な資料であるといえる。

今後は、各機関が所蔵する諸本を調査し、『明治五百題』『明治新々五百題』との比較検討及び他の類題句集との比較検討を行っていく必要がある。

(指導教員 綿抜豊昭)